

## 「治療のしくみと脳のはたらき」を読んで

少しばかり緩和ケア活動に係わっている自分だからか、本の副題が目にとまり「がんは誰が治すのか - 治療のしくみと脳のはたらき - 」を購読した。

著者は、日本と米国で抗がん剤開発の第一線に携わってきた生化学者であり、自身もがんを発病したが、手術を拒否し代替医療を選択しその経過が良好だった経験を持つ。

自身の経験や奇跡的ながんが治った患者に接する中で、専門的知識を生かして、意識(脳の働き)と自己治癒力の関連について考察を進めた書籍であった。

体の仕組みを素粒子、量子力学、代謝の仕組みから、また脳の働きやがん細胞発生及び治癒の生化学からのメカニズム、薬の成分や働きの仕組み、等々が専門用語で解説されているのだが、私は高校時代から化学、物理は苦手な方なので、チンプンカンプン。

著者は、「病気を治すのに薬がいるというのは科学万能主義(客観性、普遍性、再現性)の幻影で、人の免疫系、内分泌系、神経系の反応はまちまちであり、体質的な個人差、多様性がある。薬は自己治癒力(意識)を呼び起こすきっかけに過ぎない。病気を患うことも自分自身の一部の出来事であり、それを受容しつつ、付き合いながらどう生きるかという意識の問題が奇跡的治癒の背景にある」という。

この考察には、昔から「病は気から」という言葉があるように、また、「あるがままなるがまま」が座右の銘である自分には、何となく共感するところも感じつつ読んだ。

著者の「奇跡的治癒した人に共通するのは、自ら病気を受け入れ、その上で心の枠組みを立て直すこと(「生」の視点の転換)に成功した人たち。いま在ることに感謝し、この瞬間を全力で生きることを選んだ人たち。」という一文に接すると、何もがんに限らず、人はそれぞれ他人とは異なる不都合や事情を抱えて生活している訳だから、「あるがまま」の自身をまずは受容することが、自分自身が「生きる」ことを考える上で大切な要因となるのだろうかぁ～と改めて思う。

人は病を患ったり、自分にとって余程の不都合に出合わないと、「生きること」を考える機会は少ない。常日頃から考えていれば、受容に戸惑うことも少ないかなぁと思えるのが……。

我々は毎日、正に「生きている」のに、どうしてなのかなぁ～。「いつまでも何事もなく生きていられる」という妄想の中で生活しているからかなぁ～。